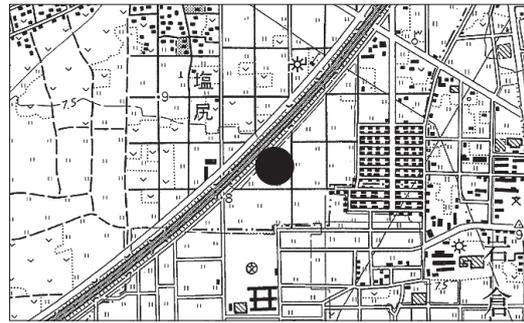


ねこじま
猫島遺跡

所在地 一宮市千秋町塩尻
 調査理由 一宮パーキングエリア建設に伴う事前調査
 調査期間 平成11年5月～平成12年3月
 調査面積 22,500 m²
 担当者 赤塚次郎・飴谷 一・加藤博紀・川添和暁・洲崎和宏



調査地点 (1/2.5万「一宮」)

調査の経過 調査は名神高速道路下り線一宮パーキングエリア建設に伴う事前調査であり、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成11年4月に範囲確認調査を、平成11年5月から平成12年3月にかけて本調査を実施した。本調査については、調査面積21,500 m²を便宜上A～I区の9つの調査区に分割し、発掘調査をおこなった。

立地と環境 猫島遺跡は、一宮市千秋町塩尻に所在し、五条川・青木川によって形成された標高7.5 m前後の微高地上に立地する。本遺跡の周辺には、西に弥生時代前期の集落として著名な元屋敷遺跡、南に弥生時代中期の水田と銅鏃が出土した伝法寺野田遺跡、東に縄文時代後晩期～弥生時代にかけての拠点的な集落である大地遺跡、弥生時代後期の墓域と考えられる蕪池遺跡など、多くの遺跡が分布している。

調査の概要 今回の調査により、遺跡の南側には北東から南西方向にのびる、大きな谷地形が広がっていることが確認され、この谷の縁辺部からその北側に展開する微高地にかけて弥生時代から中世にかけての遺構が検出された。その結果、本遺跡は弥生時代から中世にいたる複合遺跡であることがわかった。特に弥生時代中期前葉から中葉にかけての多くの遺構・遺物の存在が確認できたことは、朝日遺跡を除いた尾張地域ではほとんど例がないことから、大きな成果であるといえる。

時期区分 検出された遺構・遺物の時期から以下のように大別できる。Ⅰ期（縄文時代晩期～弥生時代）、Ⅱ期（古墳時代）、Ⅲ期（奈良～平安時代）、Ⅳ期（鎌倉～室町時代）である。

Ⅰ期 Ⅰ期は、遺構・遺物から、以下の4つの小期に細区分できる。Ⅰ-1期（縄文時代晩期～弥生時代前期）、Ⅰ-2期（弥生時代前期末～中期前葉：朝日式期を中心とする）、Ⅰ-3期（弥生時代中期中葉前半：貝田町式期古段階を中心とする）、Ⅰ-4期（弥生時代中期中葉後半～中期後葉：貝田町式期新段階を中心とする）である。

今回の調査で、環濠・掘立柱建物・竪穴住居・土壙墓及び方形周溝墓、水田など集落の構成要素となる遺構が検出されたことは、弥生時代中期前半の集落を理解する上で評価できよう。特に、低地部に掘削された2重環濠の両側から、土壙状遺構が検出されたこと、集落の南西側では、環濠の出入口をはさんだ南側に大型掘立柱建物およびそれを中心として形成された墓域がひろがり、北側居住域にも方形周溝墓・土壙墓が造営される、といった特異な景観が見られることは、大いに注目される。

Ⅰ-1期 99 G区以外の調査区において、縄文晩期に属する深鉢や弥生前期に属する壺・甕などが、少量であるが出土しており、99 A・I区及び谷の上層では該期の遺物を含む包含層が見られた。これらから、この時期に遺跡が形成されたと考えられるが、遺構については確認で

きなかったため、性格は不明である。

I-2期 弥生中期初頭には、内環濠 S D 01・外環濠 S D 02 の2重の環濠が掘削される。それぞれの規模は、内環濠は幅約 3.5 m、深さ約 0.7 m、外環濠は幅約 3 m、深さ約 0.6 m で、共に断面は逆台形を呈する。これらは、99 B・C・D・E・H区にのびており、C区では北東に、E区では北西に、それぞれ弧を描きつつさらに北側へと続くことから、環濠に囲まれた居住域の大きさはおよそ 200 m程度と思われる。居住域が展開する微高地から南東側へやや下がった低地部分では、環濠を掘削した際に土を盛り上げたと思われる高さ 0.3～0.4 m くらいの土塁状遺構が確認できた。99 E 区の北東から 99 D 区の中程にかけて見られた洪水性の砂層は、部分的に外環濠をも埋没させており、遺構との前後関係から中期前葉末頃に大規模な洪水が付近一帯にあったことが想定される。99 C 区では外環濠が途切れる部分があり、その南側に隣接して 3×3 間の掘立柱建物 S B 01 が検出された。居住域の出入口付近に位置し、南北長約 5 m・東西長約 6 m の規模を持つ掘立柱建物は、他地域と比べても例がなく、特殊な建物であった可能性が高い。この建物の南側に築かれた方形周溝墓 S Z 02 は、周溝の四隅が切れるタイプのもので、1 辺約 11 m の規模をもつ。この墳丘墓が造営されて以降、この付近には墓域が形成されていく。

I-3期 一時的に 2 重環濠が再度巡らされるが、次第にその機能は低下していく。それと共に、中期前葉において居住域であった 99 C 区では、中期中葉には環濠の内側にも墳墓が造営されるようになり、居住域の様相が変化する。そして、集落の北東側にも墓域が設けられ、南と西側には、一時的であるが、小規模な水田が見られるようになる。

中期中葉初頭に、外環濠は再掘削され、土塁状遺構も再構築されるが、中期中葉の貝田町式期古段階には、2 重環濠はなかば埋没していたようである。こうした 2 重の環濠に挟まれた特異な場所に位置する 99 E 区の竪穴住居 S K 95 は、赤色顔料の塊も検出されていることから、非日常的な活動(祭祀?)に関わる施設であったと思われる。一方、99 E 区では外環濠から枝分かかれして調査区の東へと伸びていく溝 S D 04 が掘削されていることから、部分的には機能していたと見られる。

集落の南側の墓域は B・C・I 区にわたって拡大する。整然と配置された状況から、環濠の出入口およびそれに南接する 99 C 区 S B 01 を意識していたようである。検出された 9 基の土壙墓は、概ね長軸約 2 m、短軸約 1 m を測るが、99 C 区 S K 41 は長軸約 3 m、短軸約 2 m とやや突出した規模をもつ。また方形周溝墓はいずれも周溝の四隅が切れるタイプのもので、99 B・C 区で検出された S Z 01・03・05・07 は、前段階に築かれた 99 B 区 S Z 02 と主軸を同じくする。これら 4 つの墳丘墓のうち、S Z 01 と S Z 05 は 1 辺約 11 m を測る正方形のもので、主体部を検出することができた。そして S Z 05 及び S K 41・43・54 は、環濠の出入口の北側に隣接する居住域内に造営されていることから、特殊な墳墓であったと考えられる。この墓域の東側で南北線上に並んで検出された竪穴住居 S B 02・03・04 は、これらの方形周溝墓とほぼ主軸を同じくしている。また 99 C 区 S Z 06・99 I 区 S Z 01・02 は、東西軸約 5～7 m、南北軸約 7～9 m の長方形のプランをもち、前述した 4 基の墳丘墓とは形状や主軸方向を若干異にする。墓壙は主体部を含めて 12 基が検出され、うち 6 基において組み合わせ式木棺の痕跡が認められたが、構造を明らかにす

ることはできなかった。また副葬品と思われる壺などが出土した。そしてS B 01 と基軸を同じくするS D 45 からは、廃棄されたと思われる多くの土器が出土した。一方、居住域の南東側の99 D区でも土器棺S Z 01 が検出され、99 F区でも3基の方形周溝墓が確認できたことから、調査区のさらに北東側にも墓域が展開していくと思われる。

99 H区から99 C区の谷地形に近接する低湿地部には、小規模な水田がつくられ、微高地の周縁が生産域として利用されていた状況が窺える。1つの区画の大きさは、長辺5m以上、短辺3～4m程度である。遺構の残存状況はあまり良くなく、短期間で廃絶されたようである。99 A・I区でも、西墓域の西端を区画する溝と考えられるS D 11の西側に、畦畔状の高まりによる区画がいくつか検出されたことから、この付近にも小規模な水田域が広がっていた可能性もある。99 D区・99 H区から炭化米が出土していることも、この集落で稲作が行われていたことを示す傍証となる。

I - 4 期 貝田町式期古段階に再度の大規模な洪水に見まわれたことにより、遺構の展開規模は急速に縮小していく。99 B区S Z 04は、1辺約6mの規模を持つ墳丘墓で、西側の周溝からは供献土器と思われる壺が出土した。99 A区S Z 01は、幅約3mの周溝が2本検出されたのみであるため形態は不明であるが、1辺約10m以上の規模を持つ大型の墳丘墓であることが推測される。

中期末段階では、99 C区で土坑S K 61が検出されたのみで、調査区全域においても該期の遺物は見られない。したがって、弥生時代の猫島遺跡の終焉をこの時期と考えることができる。

II 期 99 E区でのみ遺構が確認できた。溝S D 27は、調査区の北東から西へ向かって緩やかな弧を描きながらのびている。この溝の東側に位置する土坑S K 123からは、古墳時代前期初頭(廻間I式期)に位置づけられるパレススタイル土器などが出土している。また、99 D・E区の東側を覆っていた洪水性の砂層の上層や谷地形縁辺の包含層中から、「S字甕」などの古式土師器や6世紀後葉～7世紀前後のものとして推定される須恵器片など、古墳時代前期から後期にかけての遺物が散見された。

III 期 99 B・E・F区で遺構が確認されている。99 B区中央付近で検出されたS E 01は、底部に曲物が設置されていた井戸である。平面は、長径1.7m、短径1.3mの楕円形で、検出面からの深さは約0.8m、断面逆台形を呈するすり鉢状の掘形である。井戸底部に設置された曲物の製作技法からみて平安時代以降であろうと推測された。しかし、相伴する須恵器盤が型的には8世紀中葉段階に属すると見られるので、この遺構の掘削年代もその時期まで遡る可能性がある。99 E区S K 84と99 F区S K 01も、井戸と考えられる大型の土坑である。99 E区で検出された溝S D 22下層からは、ほぼ同時期に掘削されたと思われる土坑を数基検出した。このうち土坑S K 81では底面に曲物の痕跡が見られた。S K 149は複数の小土坑が連結した土坑である。これらの遺構からは、9世紀前後くらいに比定される灰釉陶器椀、須恵器杯、須恵器甕などが出土した。

IV 期 調査区全域にわたって灰釉系陶器片が出土し、溝や井戸などが検出されていることから、中世段階においては生活領域内であったことが窺われる。99 C区の西側から検出された柱穴と思われる3基の小土坑のうち、S K 29からは14世紀後葉～15世紀初頭に比定され

る北部系灰釉系陶器碗が完形で出土した。99 E 区で検出された溝 S D 29・31 は、北東から南西方向へほぼ並行して走ることから、微高地に沿った道の側溝とも考えられる。室町時代の後半になると、これらの溝に直交する小溝や東西南北の方位とはほぼ同一方向に走る溝などが掘削される。こうした状況は他の調査区においても、多く見られる。また 99 E 区 S K 51 の底面からは 2 段に積み上げられた円形曲物桶が、良好な状態で検出された。99 I 区 S K 01 からは、12 世紀後半頃に比定される灰釉系陶器碗が伏せられた状態で出土した。

谷地形の縁辺にあたる低湿地部には、方形土坑が掘削される。プランは隅丸の長方形もしくは方形に近いものがあり、大きさも長軸辺が 1 m 程度の小型のもの、1.5 m～3 m 程度の中型のもの、4 m 以上の大型のもの、との 3 種類に分かれる。また主軸方位も、中型・大型のものは南北もしくは東西方向であるが、小型のものは谷地形の方向と同じくする。出土遺物は稀薄だが、99 D 区 S K 02 からは 14 世紀頃に位置づけられる灰釉系陶器の皿が出土した。

ま と め 今回の調査によって得られた成果は、以下の 4 点である。

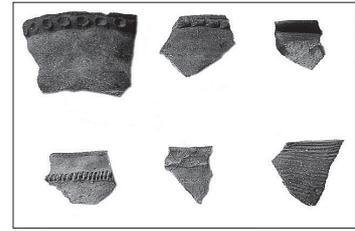
①弥生時代中期初頭から中葉段階に属する 2 重の環濠・掘立柱建物・竪穴住居・土壙墓・方形周溝墓・水田といった、集落を構成する要素となる遺構が検出された。この時期の遺跡で、これほどまとまった遺構が検出された例は、尾張地域ではほとんど類例がなく、当該期の集落を理解する上で評価できる。

②集落の西側に造営された土壙墓・方形周溝墓は、環濠の出入口および南接する大型掘立柱建物 S B 01 が設けられた「場」を意識していたようである。こうした遺構の配置から、当時の精神生活の一端を窺うことができる。また、低地部に掘削された 2 重の環濠の両側には、土塁状の高まりが築かれていたことが確認できた。

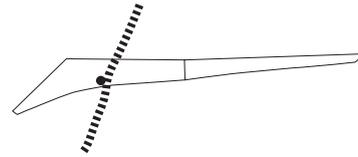
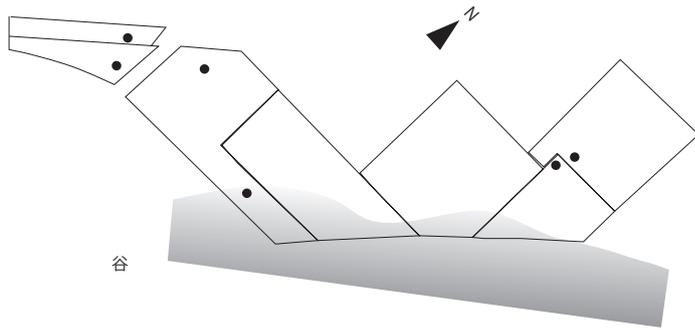
③遺構を検出することはできなかったが、調査区のほぼ全域で縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての遺物も散見されたことから、遺跡の初現はこの時期まで遡る可能性が高い。

④古墳時代から中世にかけての遺構・遺物は稀薄である。

(赤塚次郎・飴谷 一・加藤博紀・川添和暁・洲崎和宏)



I-1期 出土遺物

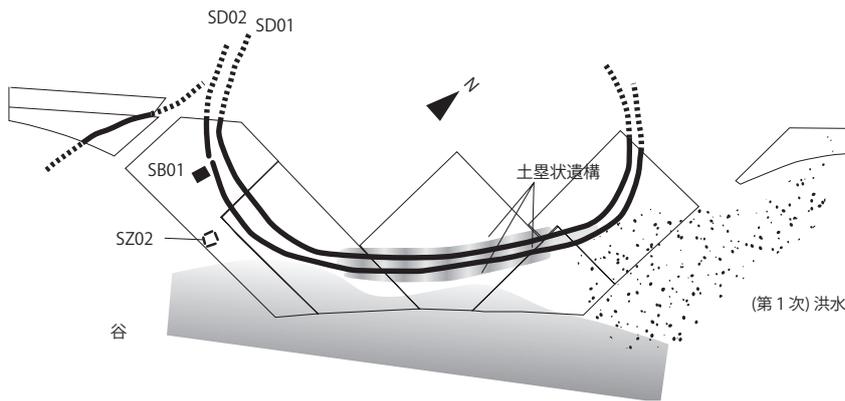


● I-1期遺物出土地点

第1図 I-1期



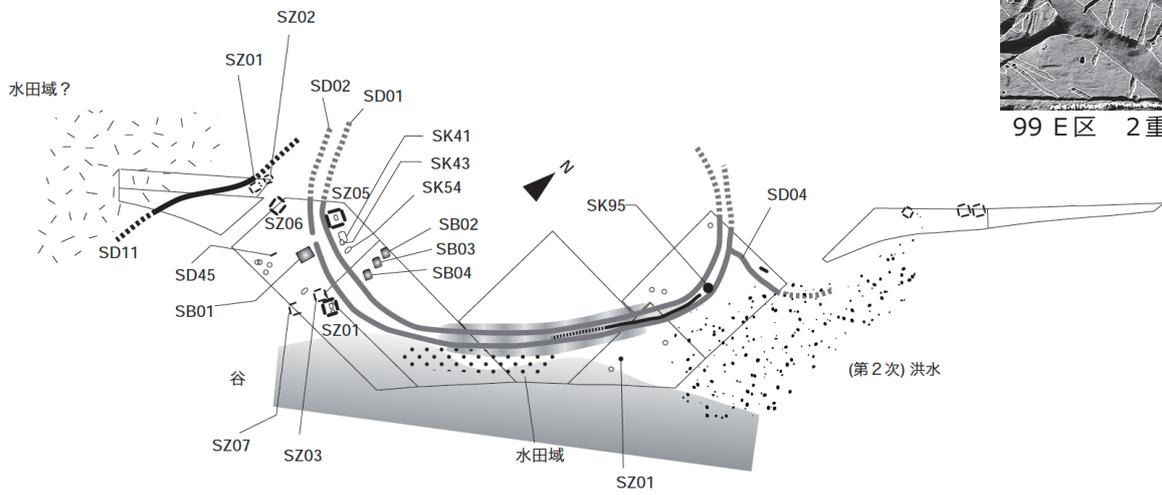
99 D区 土壘状遺構



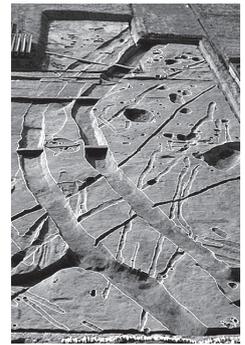
第2図 I-2期



99 C区 2重環濠



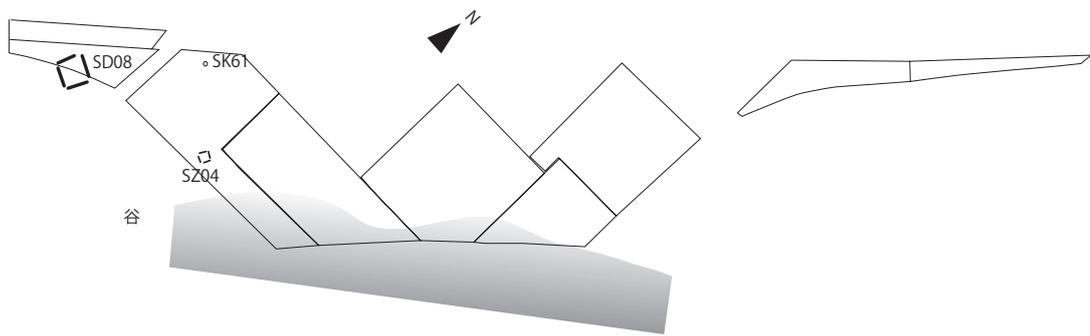
第3図 I-3期



99 E区 2重環濠



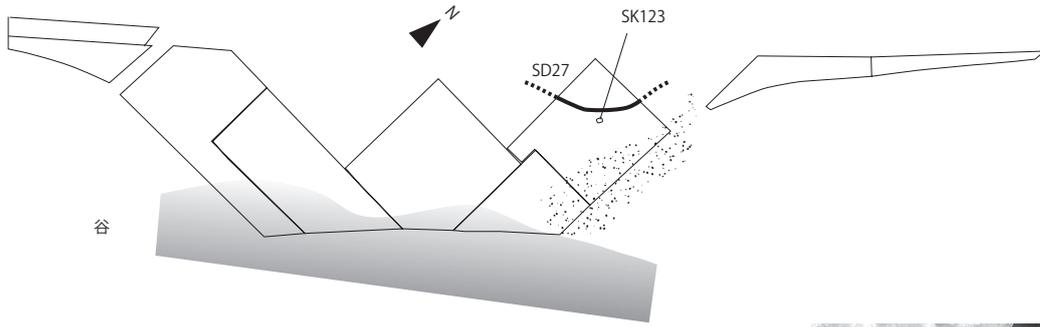
99 H区 2重環濠遺物出土状況



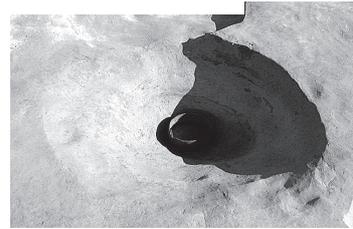
第4図 I-4期



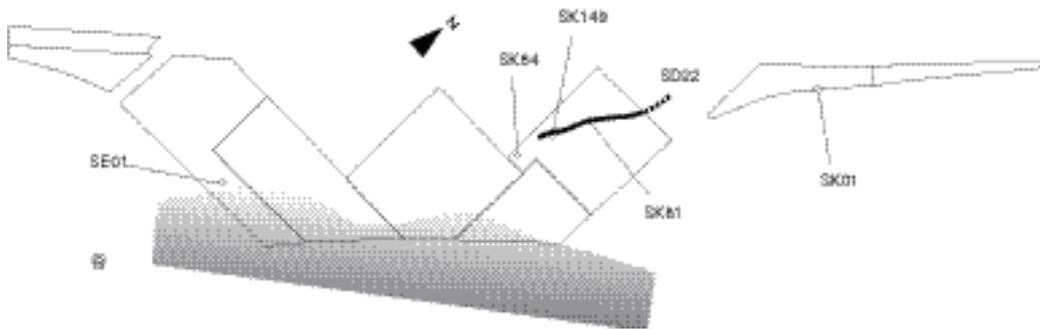
99 A区 SZ 01



第5図 II期



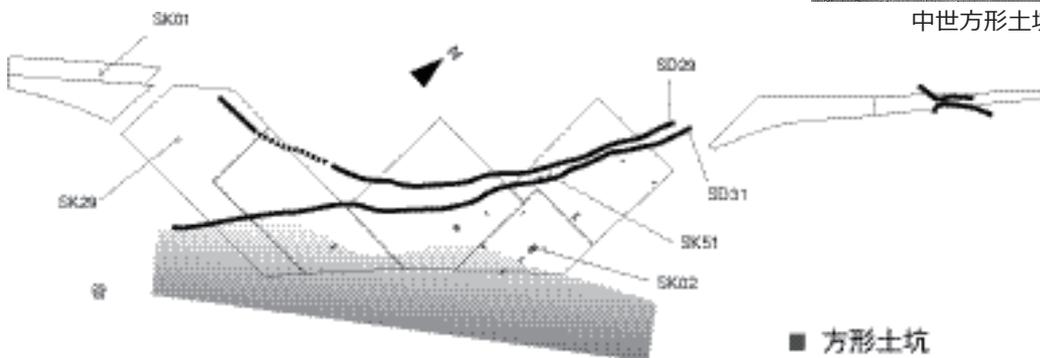
99 B区 S E 01



第6図 III期



中世方形土坑



第7図 IV期



99 B・C区 SZ 05・2重環濠・SB 01



99 C区 SB 01



99 C区 SB 01 柱痕



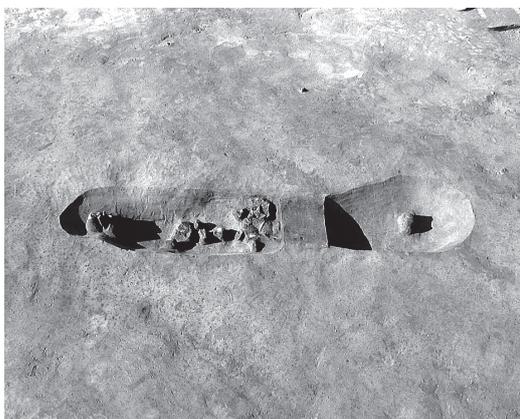
99 C区 SK 41



99 C区 SZ 05



99 C区 SZ 05 主体部 (SK 42)



99 C区 SD 45



99 E区 SK 95